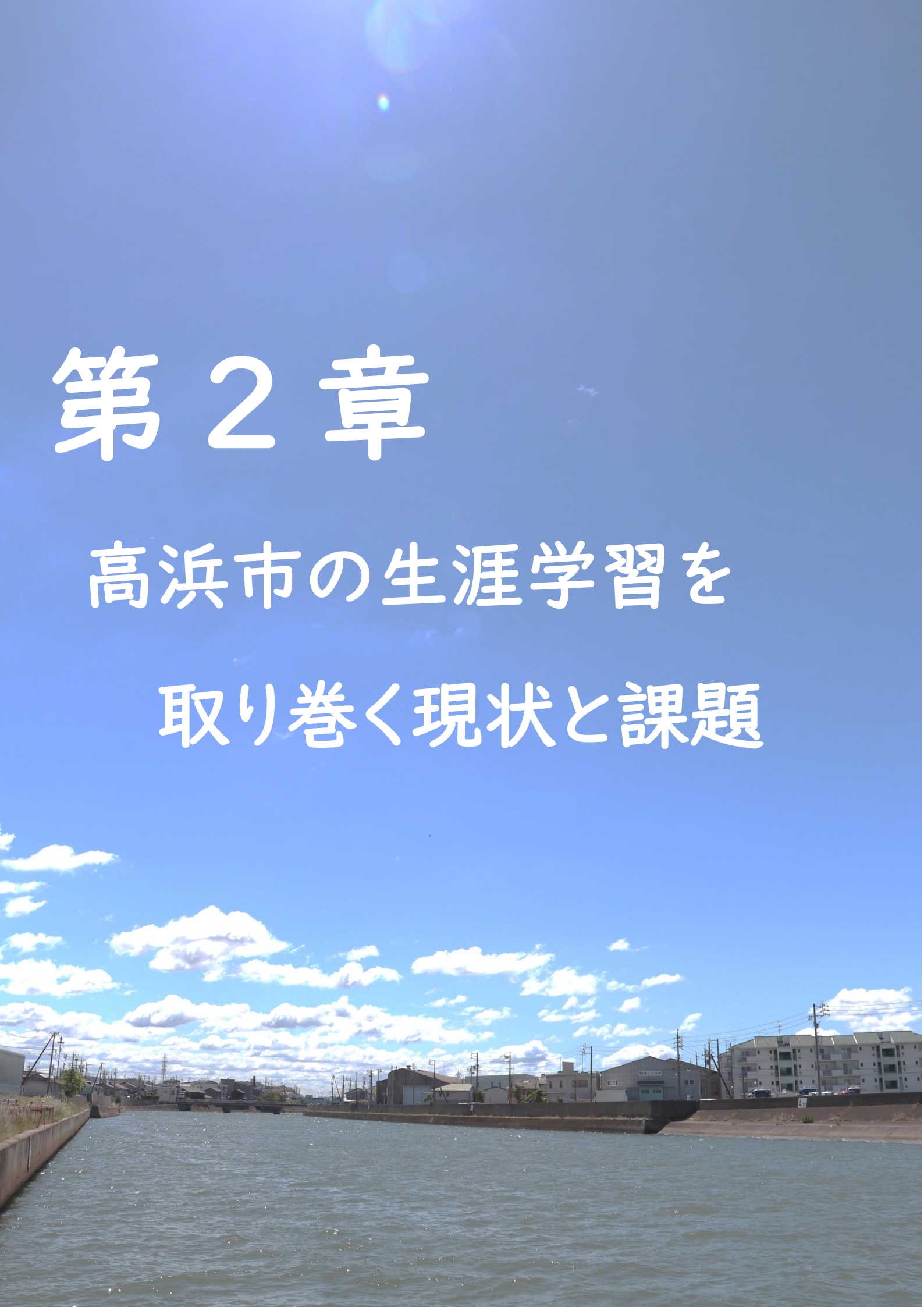
第２章

高浜市の生涯学習を取り巻く現状と課題



第２章　高浜市の生涯学習を取り巻く現状と課題

１.高浜市を取り巻く社会背景

（１）人口構造の変化

・近年の高浜市の総人口は 49,000 人程度で推移しています。年少人口　（０～14 歳）は減少傾向にあり、生産年齢人口（15～64 歳）も 2030 年をピークに減少に転じると見込まれています。老年人口（65 歳以上）においても、約 40 年後の 2060 年には減少に転じると見込まれています。
（出典:「高浜市まち・ひと・しごと創生人口ビジョン（令和２年３月改訂）」）

・全国で見ると、平成 27 年（2015）に 100 万６千人であった年間出生数は、令和元年（2019）には 86 万５千人と過去最少を記録し、少子化が加速化しています。

・全国で見ると、平均寿命が延伸しており、超高齢化社会が進展しています。90 歳まで生存する人の割合は、令和２年（2020）に生まれた人では、男性２８．１％、女性５２．６％と言われています（出典：内閣府「高齢社会白書」令和４年版）。
また、日常生活に制限のない期間（健康寿命）は、令和元年時点で男性が 72.68 歳、女性が 75.38 歳となっており、健康寿命の延伸が見られるようになっています（出典：内閣府「高齢社会白書」令和４年版）。
より一層、平均寿命と健康寿命との差を縮めていくことが大切です。

（２）情報社会の進展

・パソコン・携帯電話・スマートフォンの普及や ICT＊を活用したサービスの進展などは、ライフスタイルや働き方、コミュニケーション手段などに変化をもたらしています。情報格差の解消、技術の急速な進展や社会変化に対応できる知識や技能などを身につけていくことが求められています。

・第４次産業革命ともいわれる IOT＊や AI＊をはじめとする技術革新の一層の進展により、新たな知識やアイデアが生まれる可能性を秘めています。

＊ＩＣＴ・・・情報通信技術（Information and Communication Technology」）の略で、PC だけでなくスマートフォンやスマートスピーカーなど、さまざまな形状のコンピュータを使った情報処理や通信技術の総称を指します。

＊ＩＯＴ・・・Internet of Things の略で、「様々な物がイン ターネットにつながること」「インターネットにつながる様々な物」を指しています。IoT は、日本語で「モノのインターネット」と訳され、PC に限らず様々なモノがインターネットにつながります。

＊ＡＩ・・・人工知能（Artificial Intelligence）の略。コンピュータの性能が大きく向上したことにより、機械であるコンピュータが「学ぶ」ことができるようになり、その機械学習を始めとしたＡＩ技術により、翻訳、自動運転、画像診断等の人間の知的活動に大きな役割を果たしています。

（３）家族形態や子どもの教育・生活環境などの変化

・新型コロナウイルス感染症を契機に、暮らしや働き方の新しいスタイルが定着しつつあります。
・情報社会の進展の一方で、顔を合わせること（フェイス・トゥ・フェイス）、集うことの大切さが見直されています。
・単身世帯の増加や地域とのつながりの希薄化（町内会加入率の低下）なども課題として挙げられるようになりました。
・両親共働き世帯の増加や、学校教育におけるGIGAスクール構想推進など、家庭や子どもの教育環境に変化があります。家庭・学校・地域がそれぞれ連帯しながら総合的に教育力を向上していく必要があります。

（４）SDGs（持続可能な開発目標）の視点

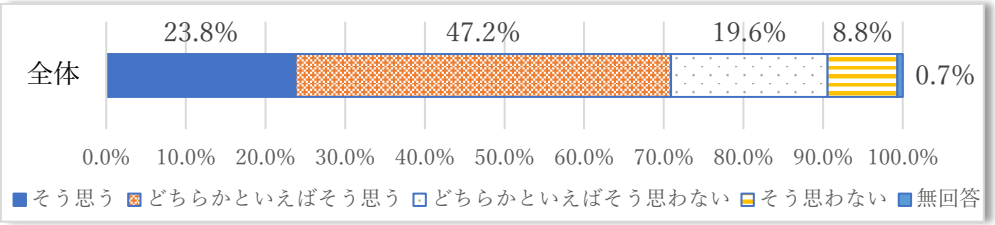
・SDGs は、発展途上国のみならず先進国を含む国際社会全体の開発目標として、持続可能な世界を実現するための包括的な 17 の目標及び細分化された 169 のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない」社会の実現を目指し、環境・経済・社会の諸課題を包括的に扱い、広範囲な課題に対する統合的な取組が示されています。
・その目標のひとつには「４.質の高い教育をみんなに　-すべての人々に包摂的かつ公正で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する- 」が掲げられています。

2. 市民意識調査からみた現状

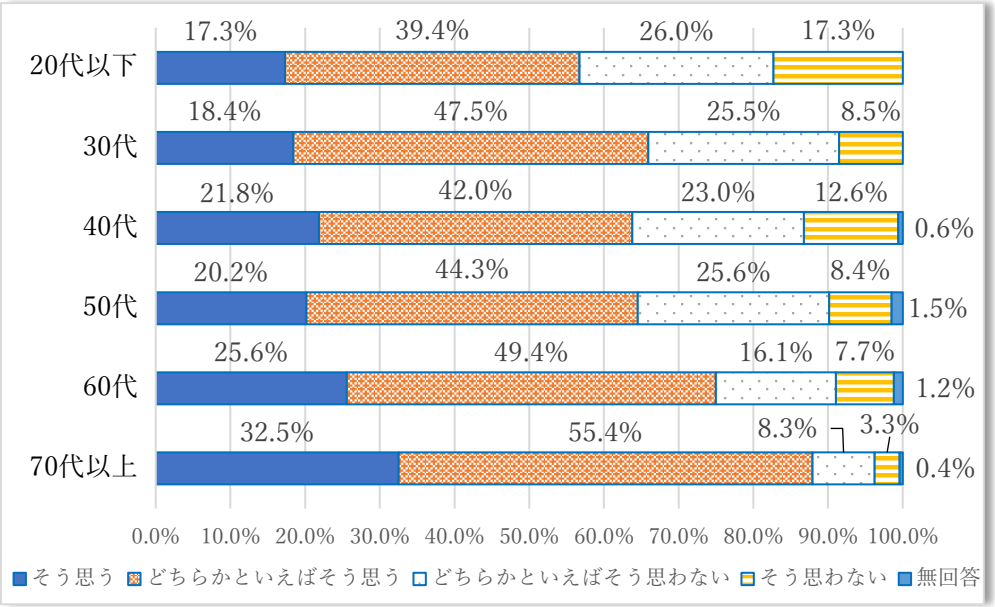
令和４年（2022）12 月に「市民意識調査」（満 18 歳以上の市民 2,500 人を無作為抽出）と「児童・生徒の意識や行動に関するアンケート」（小学６年生と中学３年生を対象）を実施しています。その主な結果については、以下のとおりです。

（１）市民意識調査

① 高浜市に愛着や誇りを持っている人の割合



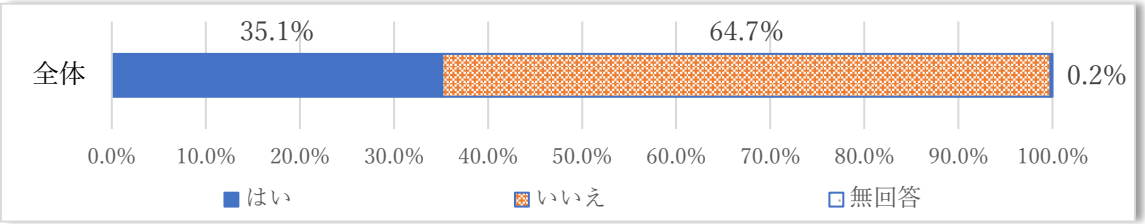
「そう思う＋どちらかといえばそう思う」を足すと 71%の人が愛着や誇りを持っている結果です。



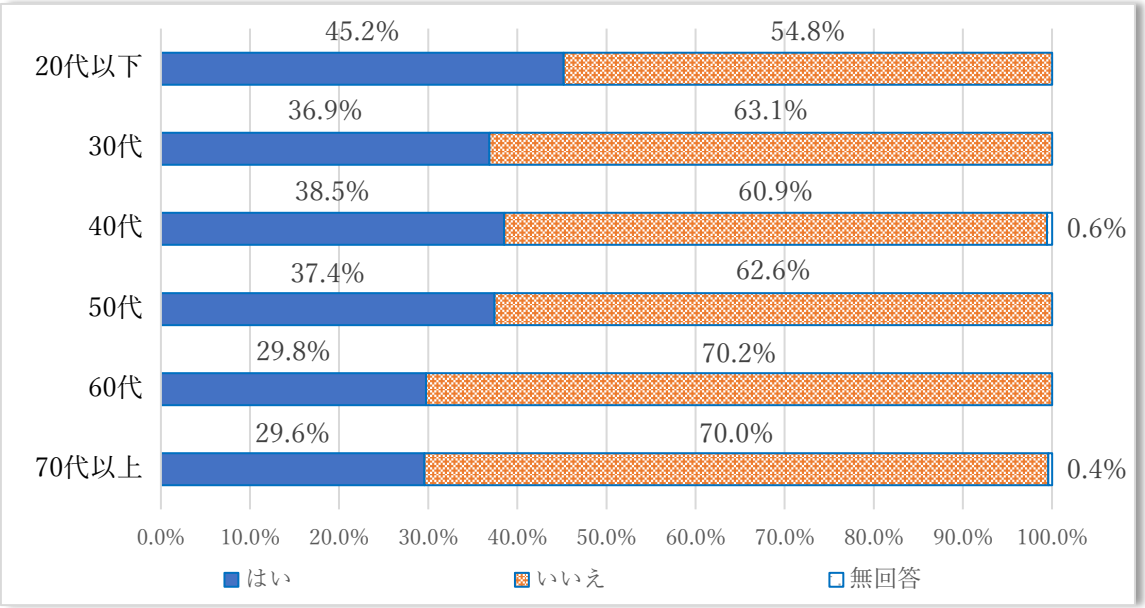
高浜市に愛着や誇りを持っている人の割合が低下すると、まちの歴史や伝統・文化に対する関心や「誰かのために役立ちたい」「住んでいるまちをよりよくしたい」といったまちづくりの原動力が希薄になることが危惧されます。

学び・文化・スポーツ活動を通して、人とのつながりやまちの魅力の掘り起こしを行いながらまちづくりの原動力となる愛着や誇りを育んでいくことが重要です。

② 持っている知識・特技・体験などを地域や社会活動に活かしている人の割合



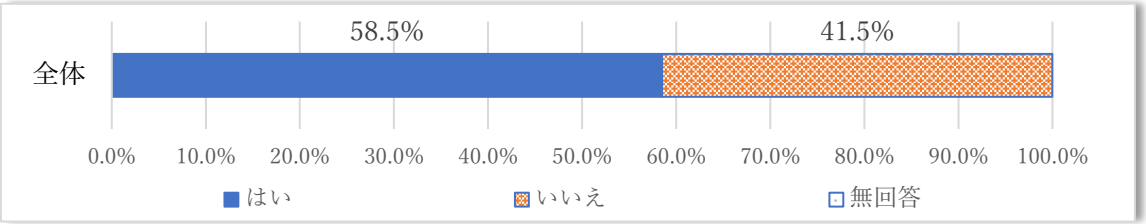
約 35%の人が自分の持っている知識・特技・体験などを地域や社会活動に活かしていると回答しています。



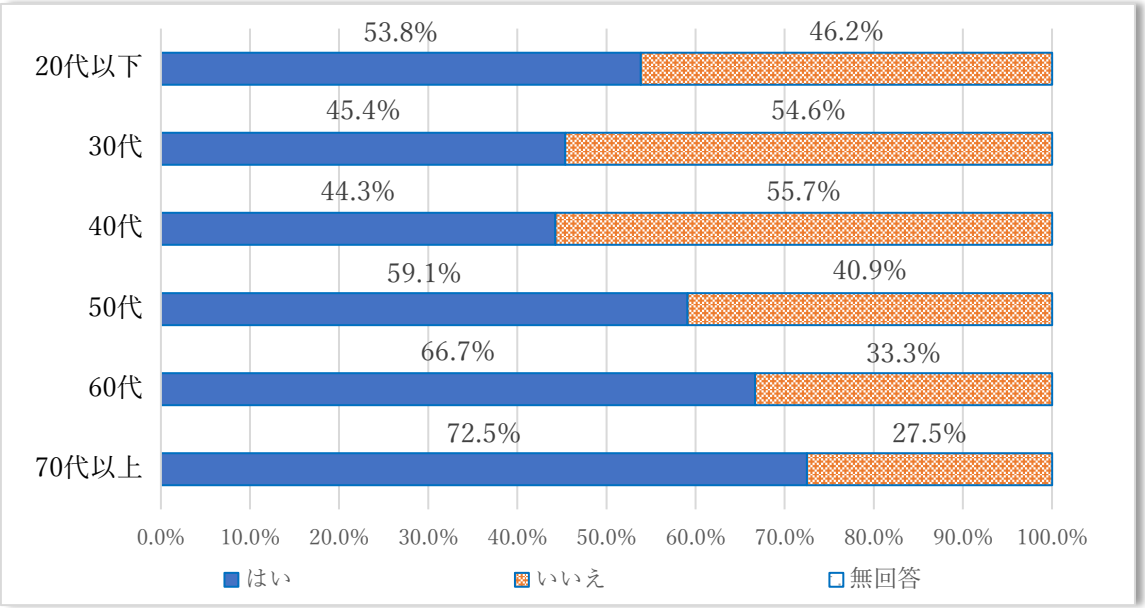
市民の皆さんが持っている知識・特技・体験は、まちの財産でもあります。「自分のための学び」にとどまることなく、「教える」「発表する」「活動する」など、学びで培った知恵・特技などを地域や社会の中で様々な形で活かしていくことが重要です。

そうすることによって「もっと知りたい」「何かやってみたい」「誰かの役にたちたい」「住んでいるまちをよりよくしたい」といった学びの好奇心や意欲の向上、まちへの愛着・誇りの醸成、まちづくりへの参加・参画のすそ野の広がりが期待されます。

③ 体力や健康の保持増進を目的として、習慣的に体を動かしている割合



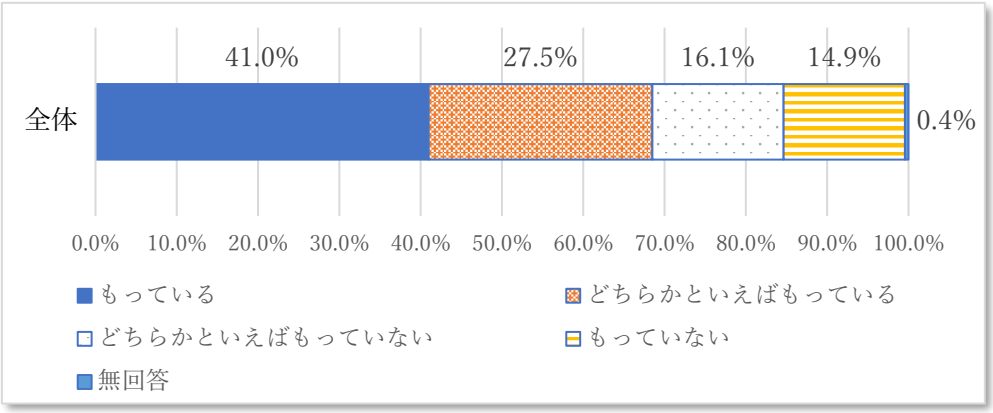
約６割の人が日常的に体を動かしていると回答しています。



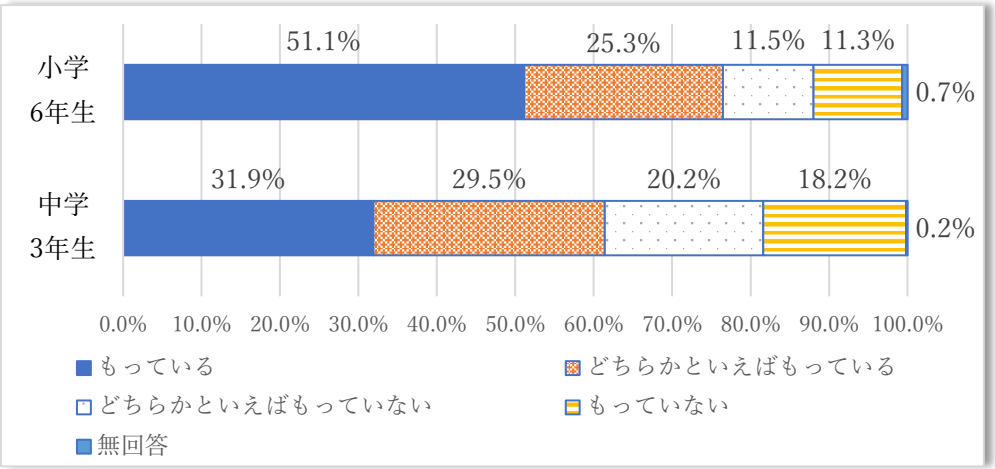
50 歳代以上から体を動かしている割合が高くなっていることから、歳を重ねると同時に、生涯を健康に過ごすことを望んでいる方が多くいることがわかります。

（２）小中学生アンケート

「あなたは将来の夢や目標をもっていますか？」



「もっている＋どちらかといえばもっている」を足すと 68．5%の児童・生徒が将来の夢や目標を持っています。



中学３年生は小学６年生と比べ、「もっている＋どちらかといえばもっている」と回答した割合が 15 ポイント減少しています。

学年が上がるにつれ、環境の変化や進路について考えることが多くなることから低下していると想定されます。

３.「第２次高浜市生涯学習基本構想・基本計画」の振り返り

『第２次高浜市生涯学習基本構想・基本計画』では、「学び合い 力を合わせて豊かな未来を育もう-「まなび」でつなぐ 大家族たかはま-」を基本理念に掲げ、基本方針に沿った取組みを、行政だけでなく、市民・団体・事業者・関係機関など多様な主体と連携しながら推進してきました。

主な取組内容とその成果・課題は、次のとおりです。

（１）「まなび」の芽を発芽させよう！

目標①　自分磨きを続けていこう！
目標②　未来に羽ばたく人材を育てていこう！
目標③　セカンドライフをいきいきと過ごそう！

【キーワード】好奇心に灯をともそう

主な取組み・成果	今後の課題・新たな課題
○かわら美術館や図書館、公民館のほか、まちづくり協議会などの市民団体が主催となり、学びの好奇心や意欲を高める多種多様な講座・体験事業が活発に行われた。	●学びの入り口となる知的好奇心に灯をともし続けたり、生き抜く力を磨くなど、成長を続けられる機会を、より一層豊かにしていくことが大切である。 ●情報通信技術（ＩＣＴ）を取り入れた多様な学びを推進していく必要がある。
○たかはま夢・未来塾をはじめ、文化・スポーツなどの全国・世界大会へ多くの子どもが出場している。好成績を収める子どもも多く、市民やまちの自慢・誇りにつながっている。 ○市民ムービー「タカハマ物語」の制作等を通して、年齢を超えた人と人とのつながり、自ら考え行動できる子ども・若者の育成、住んでいるまちのために何かやってみたいという想いの醸成や行動につなげることができた。	●地域の大人たちに見守られ、育った子ども・若者たちが、サポーターや指導者など、次世代当のためにまなびの担い手として活躍できるようにしていくことが大切である。

○地域課題をビジネスで解決する高浜高校ＳＢＰ（ソーシャル・ビジネス・プロジェクト）活動がスタート。鬼瓦職人や自動車部品メーカーとの連携や、プロバスケットボールリーグ・シーホース三河のイベント出店収益で高浜市の子どもたちをシーホース三河の試合へ招待をめざす取組みなどが評価され、「第５回全国高校生ＳＢＰ交流フェア」で文部科学大臣賞を受賞。	 高浜高校ＳＢＰ活動
○子ども健全育成支援員を配置し、子ども・若者への相談支援を実施した。また、学習支援事業（例：ステップ）も併せて開始した。	●社会経済的背景にとらわれず、子ども・若者の「学びたい」という想いを支えていくことが大切である。
○特定非営利活動法人たかはまスポーツクラブ、市スポーツ推進委員会、市スポーツ協会、高浜ボートクラブ等と連携・協働により、各種スポーツイベントを実施。	●年齢等を問わず、いつでも・どこでも・だれでも・いつまでも気軽に楽しめるニュースポーツ（例：ボッチャ）を、より一層普及させていく必要がある。
○東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会の開催にちなんだ行事など（例：地域交流施設「たかぴあ」エントランスホールにおける特集展示、東京 2020 パラリンピック聖火（大家族たかはまの火）採火など）を実施した。	 ミニ展示「東京２０２０オリンピック・パラリンピック～高浜編～」
○生涯現役まちづくり事業（例：健康自生地）の推進により、高齢者の閉じこもり予防、外出機会や活動担い手としての活躍の場などが創出された。	●高齢者の外出促進、人とのつながりを育みながら楽しく、生きがいを持てる場づくりをさらに進めていく必要がある。

（２）「まなび」の芽を育てるために、
みんなで水や養分を与え合おう！

目標①　学区を基盤とした世代間交流を活発にしよう！
目標②　教え・教えられる仲間づくりを築いていこう！
目標③　まなびの資源を有効活用しよう！
【キーワード】人と人 人と「まなび」を結び合おう！

主な取組み・成果	今後の課題・新たな課題
○まちづくり協議会などの市民団体が主体となり、市民の持っている知恵・特技・経験等を活かした市民交流事業、地域課題の解決や地域の魅力増進に資する事業が活発に行われた。（例：青パト乗車体験、災害疑似体験、防犯防災運動会、菊１本でまちづくり事業、稗田川・花と緑のプロジェクト、ふれあい農園事業など）	●子どもたちが地域の方たち（ゲストティーチャー）と関わる中で、地域や社会に関心を持ち、「自分も高浜市民の一員である」ことを自覚し、自分にもできることを考え、実践できるようにしていくことが大切である。
○公民館活動とまちづくり協議会活動の統合が行われ、小学校区を単位に、地域の力がより集約化され、総合力が高まってきた。 ○３小学校区（港・翼・高取）のおやじの会が連携した取組みが行われるようになった。	●公民館活動や子ども会活動など、既存組織のあり方が変容する傾向が見られる。活動の根っこは大切にしつつも、状況によっては、時代に合わせて組織や活動を見直していくことも必要となる。
○「ざっくばらんなカフェ」など、多様な人が集い、ゆるやかにつながり合う場を創出した。 ○かわら美術館や図書館などにおいて、市内小中学校や高浜高校と連携した事業が行われた。	●「自分のための学び」にとどまることなく、学んだり体験したことを「教える」「発表する」「活動する」など、社会の中で、あるいは次の世代のために様々な形で活かせるよう、活動の担い手の掘り起こしと育成、市民同士の学び合い・高め合いの場づくり、学びを通した

（例）中学校吹奏楽部や美術部、高浜高校手話部との連携による「オリオン座コンサート（かわら美術館）、高浜高校手話部の部員が講師となった「手話講座」（図書館）、高浜高校写真部と三州瓦工業共同組合との連携によるカレンダー製作	人とのつながりづくりを、市民団体・地域・関係機関とも連携・協力しながら進めていく必要がある。
○公共施設再編のモデル事業として、高浜小学校の複合施設として「地域交流施設」（愛称：たかぴあ）がオープンした。 ○スポーツや市民交流の場として「高浜芳川緑地多目的広場」がオープンした。	●「公共施設総合管理計画」や年度ごとに策定する「公共施設推進プラン」に基づき、公共施設の再編や有効活用などに取り組んでいく必要がある。
○民間活力による新たなスポーツ拠点の整備・運営として「勤労青少年ホーム跡地活用事業」が始まった。 ○図書館機能をかわら美術館といきいき広場へ移転する方針が決まった（令和５年度から「かわら美術館・図書館」として運営がスタート）。	●情報通信技術（ＩＣＴ）を活用した、新たなつながりを育んでいく必要がある。
○多文化共生コミュニティセンターがオープンした。	●文化や個性など、多様性を理解し、認め合い、一人ひとりが輝くことができる風土を育んでいくことが必要である。
○大学や企業との連携による事業を実施した。 （例：愛知教育大学地域連携講座、名古市立大学「聞き書きプロジェクト」）	●関係人口の増加など、多様な主体との連携・協力関係を豊かにしていくことが大切である。

ふれあい農園事業

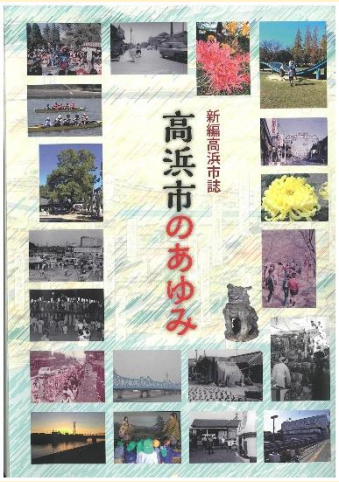
高浜小学校と地域交流施設「たかぴあ」

（３）「まなび」の根っこをしっかりと大地へ下ろし、芽を大樹のように育てていこう！

目標①　まちへの愛着と誇りを高めていこう！

目標②　まなびの成果や地域の個性をまちづくりに活かしていこう！

【キーワード】「まなび」の輪をまち全体へ広げていこう！

主な取組み・成果	今後の課題・新たな課題
○「タカハマ！まるごと宝箱」事業による高浜市の魅力・自慢の掘り起こし、市民同士の語り合いを進めた。魅力・自慢の伝承・活用等が重要であるという意識を高めることができた。新たな「高浜市誌」の編さんの動きにつながった。 ○「市民とともにつむぐ・つなぐ」を基本方針として、新編高浜市誌「高浜市のあゆみ」を編さん・発行した。新たな資料の掘り起こし、散逸・消失しかねない資料や人々の記憶等を記録として残すことができた。市の文化財指定にもつながった。編さんを契機に、調査依頼が寄せられたり、「まちのことを知りたい」「調べてみたい」という動きが少しずつ起こり始めた。 ○市誌編さん後の取組みとして、市誌を読む会、ミニ展示、たかはま歴史散歩、高浜市のあゆみ資料発行に向けた補足調査など、「たかはま歴史・文化保存活用事業」を推進した。	●まちづくりの原動力となる「高浜市が好き」「住んでいるまちをより良くしたい」という関心や想いを高めていくことが重要である。 ●様々な角度から、まちの魅力・自慢（歴史・文化・伝統・産業・景観等）を見る・聴く・触れる機会を設けていくことが大切である。 ●新編高浜市誌「高浜市誌」に掲載しきれなかった先人たちの足跡等について調査を継続し、後世へ伝え、人づくり・まちづくりに活かしていく必要がある。  新編高浜市誌「高浜市のあゆみ」
○園児・児童・生徒による鬼あかり（ランプシェード）の制作・展示	
○「菊人形づくり」を高浜市無形文化財に指定	●文化・伝統の伝承、後継者育成が重要である。

○南海山地蔵寺「六道絵」「浄土図」（地獄極楽絵図）を高浜市有形文化財に指定 ○寿覚寺「絹本着色方便法身尊像」「蓮如上人六字名号」「蓮如上人九字名号」を高浜市有形文化財に指定 ○小学６年生を対象に、市民と行政が連携し「自治基本条例出前授業」を実施した。 ○市制５０周年記念事業を、若者を含む市民との協働により企画立案・実施した。 ○「第７次高浜市総合計画」の策定や「図書館フォーラム」など、各種計画づくりなどに関するワークショップなどをとおして、市民とともにまちの将来像について考えた。	●まちづくりを自分ごととして捉えることができるよう、まちの課題や魅力・自慢を知り、将来を考える機会や、一人ひとりができることやみんなでできることを考える機会を設け、課題解決や魅力増進に向けて行動に移していくことができる人材を育成していくことが大切である。 ●学びは人づくりやまちづくりの土台となる重要な要素であるという意識を高めるとととともに、子育て・子育ち、福祉、健康、環境、防犯・防災、産業、職業訓練など、様々な分野の取組みをまなびという視点で横ぐしを通し、まなびの効果を高めていくことが大切である。

たかはま歴史散歩

『図書館の新たなカタチ』フォーラム